



金色の屋根が独特の存在感を放つモスク。北部ではイスラム教、南部ではキリスト教が主に信仰されている



アブジャ市内から見渡せる岩山「アソロック」。壮大にそびえ立つ姿に圧倒された

国の名を聞いて、日本人は何を想像するだろうか。アフリカ、資源、成長、テロ、犯罪……。おそらく、後者の負のイメージが強いのではないだろうか。

しかし世界中どこでも、日常生活を送る人々がいる。その事実を確かめたくて、日本から現地に飛んだのが3月下旬だった。

「日本から女性一人でここまで来たの？すごいね」
ドライバーにそう言われてハッと。日本でも、女性の社会進出については課題がある。しかし、ここナイジェリアでは、また違った現実があるという。アフリカ最大の産油国であり、ここ数年の経済成長は目覚ましい。しかし、まだまだ女性の活躍の場は限られる。特に北部のイスラム圏では、いまだ「女性は家にいるべき」という考えもある。

そんな状況を国を挙げて変えようという動きが、今から30年以上も前に起こっていた。1980年代、マリヤム・ババンギダ大統領夫人（当時）のイニシアチブで、女性が識字教育や職業訓練を受けられる場として全国に建設されたのが「女性センター」。その数は、なんと700以上。しかし時がたつにつれて、その膨大な数の施設の維持管理が難しくなり、実質的には多くが機能しなくなってしまった。

女性がきちんと力を発揮できるような社会をつくりたい。そこで立ち上がったのが国立女性開発センター（NCWD）。全国の女性センターを管轄する本部として95年に設立された組織だ。彼らの要請を受けて、日本が調査に入っただけで10年前。「女性センターを復活させよう」。日本とナイジェリアの挑戦が始まった。

市街地から西へ車を走らせると、道路のごぼごぼが目立つようになってきた。インフラ整備が追い付いていないことに気付かされる。向かったのは、首都アブジャに隣接するナイジャ州。元大統領夫人の出身地でもあるというこの土地で、女性センターの活動を視察するためだ。

首都から案内してくれたのは、日本人専門家チームの一人、甲斐田きよみさん（オーピーシー株式会社）。アフリカの女性支援に携わって約20年というベテランだ。アフリカとのつながりは、青年海外協力隊員としてニジエールで活動してから。

「それ以降はずっと、アフリカ、女性をテーマに仕事をしています」と頼もしい。

約3時間かけて着いたのが州都ミナ。こぢんまりとした街の中心部から30分ちよっと行ったところに、2階建ての建物が現れた。パイコロ女性センターだ。

「いらっしやい！遠くからよく来たわね」
そう笑顔で迎えてくれ



赤ちゃんをおぶって編み物の授業を受ける女性。育児をしながらも学べる環境が整いつつある



ナイジャ州のパイコロ女性センター。「女性たちが設備の整った環境で学べるように」と、最近建て替えられた



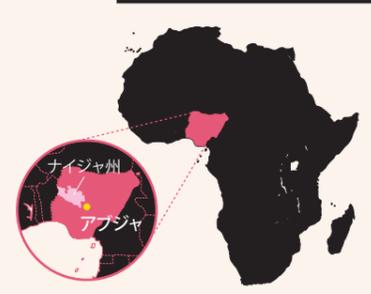
はるか時を超えて、ナイジェリアの女性たちが愛用していたのは日本で昔使われていた編み機だった



ナイジェリア全土にある女性センターは、技術を学ぶだけでなく、女性と社会をつなぐ懸け橋にもなっている

生きる力を育む学び舎

ナイジェリア
from Nigeria



アフリカ最大の産油国として知られるナイジェリア。近年著しい成長を遂げているが、女性の活躍の場はまだ限られている。国づくりに女性の力を活用しようと、社会を変える仕組みづくりが進む現場を訪れた。

成長の裏側で女性たちは…

真つすぐに延びるアスファルトの道路。中央分離帯には緑の葉をつけた木々が整然と並び、その先には高層ビルがそびえ立つ。ナイジェリアの首都アブジャは、アフリカの成長の象徴だ。

戦後の日本の近代建築をリードしてきた建築家、丹下健三がこの街の都市計画を手掛けたと聞いて、一気に親近感が湧いた。その

女性たちが生き生きと学べる場をつくる

女性センターの講師、生徒たちと、授業で作った服を見ながら話をする甲斐田さん。卒業後は、ミシンを購入する補助を出すなど、仕事につながる後押しもしている



「国づくりを進める上で女性の力は重要です」と言い切るのは、NCWD計画調査統計局長のサディック・オマルさん。「しかし現状では、彼女たちが能力を伸ばし、生かせる場所がない。それを支えるのは国の役割です」と力強く語る。最近では各州のラジオ局と連携し、地元的女性センターを紹介する番組を流し始めた。地方部ではほとんどの家庭でラジオが唯一の情報源。女性センターの存在を広く知ってもらい、家族からの理解を得ることが目的だ。

NCWDには日本で研修を受けたことがあるスタッフも多く、「日本は設備が整っていて、女性たちがみんなで協力しながら働いてい

るのが印象的でした。資金面の課題は大きいですが、それでも私たちにできることはあるはず」と意欲を見せた。



日本でも人気が高いシアバター製品。いつか日本で彼女たちの製品が買える日が来るかもしれない

シアの実を砕く女性協同組合のメンバー。おそろいの服を身にまとい、一致団結して活動を進めている

ナイジェラ州だけではない。現在、JICAのプロジェクトはパイロット地域の6州で進行中。全国の女性センターをNCWDがかじを取って活性化させていくべく、必要な仕組みづくりと職員の能力強化に取り組んでいる。「ナイジェリア人は声が大いなので怒っているように見えるんですが、実はみんな温かくて仕事熱心ですよ」と甲斐田さんはほほ笑む。ナイジェリアの支援に携って10年というだけあって、NCWDのスタッフとの息もぴったりだ。

「団体の名のハスケ」は光という意味なのよ。私たちの活動が、ナイジェリアの女性たちに光をもたらすようにね。そう説明してくれたのは、ザイナブ・アバカル代表。最近、州女性省はこのように女性協同組合と女性センターの橋渡しを始めた。「卒業後、彼女たちが技術を生かして仕事をするにはどうしたらいいか。個人でやるのも一つの手段ですが、地域の女性が集まって活動するというモデルも参考にしてもらいたい」と甲斐田さんは話す。



全国の女性センターの活性化を目指して

卒業後の道を切り開くために



ビーズを細い糸に一つ一つ通していく。根気がいる作業だが、「出来上がりを見るのがうれしくて」とみんな懸命に取り組んでいた



女性センターの生徒たちの力作。鮮やかな色使いに独特のセンスが感じられる

足踏みミシンと手縫いで服を仕上げていく。外出する機会が限られる女性たちにとって、クラスメートとの作業は楽しい時間だ



たのは、女性開発オフィサーのポーリン・ダニエルさん。約80人が通うというこのセンターでは、縫製、編み物、ビーズ細工、染め物などのコースがある。毎日4時間程度、希望のコースで技術を学ぶのだ。

「今日のレッスンは10時からなのよ。もうちょっと待ってね」縫製コースの部屋では、少し早めに来た生徒たちが準備をしていた。カタカタカタカタ…。昔懐かしい足踏みミシンの音が響き渡

る。これなら停電が起きても心配ない。

「ナイジェリアの女性の服は全て手作りなの。オーダーメイドだから、縫製の仕事の需要は多いのよ」と、講師のハマイア・モハメッドさんが教えてくれた。「家事や農作業との両立は大変だけど、自分の納得のいく服ができた時はうれしい」。そう話してくれた生徒のハフサル・ペロさんはまだ22歳。背中では、赤ちゃんがすやすやと眠っている。「手に職をつけ、もっと家族の助けになりたい。夫も応援してくれています」。ほとんどの生徒が10代後半から20代。「女性も働く時代よね」と張り切る。

そして、隣の編み物コースで見つけたのは、なんと日本製の編み機だ。30年以上前に日本で使用されていたものらしいが、実物を見るのは初めて。それがナイジェリアでは、何とも不思議な縁だ。「編み機を置く机の脚がぐらぐらしていますね。これは修理しないと」と甲斐田さん。そんな一つ一つの気付きが、女性センターの改善につながる。「これからは、縫製や編み物だけでなく、新しいニーズにも合ったコースを組み込んでいきたい。家族が幸せになるためには女性の技術が必要ですから」とナイジェラ州女性省のラハマ・バロア局長は笑顔を見せた。



NCWDのオマル計画調査統計局長。「家族の理解を得て、しっかりと女性センターで学べるような環境を整えたい」と意欲的だ



かつて教師をしていたというナイジェラ州女性省のバロア局長。「女性の学びの場をもっと増やしていきたい」と話す